

# 物質と精神の架橋 (完)

右衛門佐 重雄

## 四、生命の論理的解釋

——形質の場の辨證法——

生命に於ける指導的全體性は生物が生きているという事實によつて認めねばならないものであつて、形態をもつた物質系以外にその物質を動的に統制する客觀的に規定できない力の存在することを認めるとき、われ／＼はこの力の主體を形相と名稱したのである。今人體に即してこのことを見れば、凡そ、人間には腦という部分がある。そこに於て人間の意志の物理的影響が始まるのであつて、その部分からの影響に於て決意が行動に變化される。即ち人間の活動を司る中樞の統制力が、神經、筋骨等の連結によつて細胞の末端にまで傳えられるのである。このことによつてこの「力」を漸層的階位的にみるとき、われわれは、肉體を一個の統制された獨立體たらしめている「個體力」の存在と、その統制を可能にするために肉體の各部分の間に發揮されている内部的「關聯力」の存在と、及び一々の肉體細胞が自らを機能發現の單位たらしめている「細胞力」とでも

物質と精神の架橋(完)

いふべきものの存在を認めることができる。これは一つの全體を階段的に見たものであり、下位の統一力は上位のものによつて常に包まれているものではある。

ちなみに、こゝに統一力を三段に區分した理由は生理學的な見地によつてゐる。即ち、生活體には最下位の統一の單位として「細胞」があり——というのは、細胞の成分としての核や仁や夥粒やヒポコンドリウムや細胞膜等はそれのみでは存續し得ず、一つの全體性を保ち得ないからである——同様な形態と働らきをもつ細胞が群をなして「組織」——神經組織・支柱組織・筋肉組織等——があり、種々の組織が集つて特別の働らきをする「器官」——心臓・肺臓・肝臓等——があり、多數の器官が集つて同一目的の生理作用をする「系」——呼吸系・消化系・循環系等——があり、この系統が協力綜合されて「身體」がある。こゝに次々に現れる全體性はより上位の全體者の機關となり機能の分擔者となる。然し、組織や器官や系は細胞が獨立性をもつようにはその獨立性をもつていない。それはより大きな全體性に高まる素材として、いわば、横に聯絡するものとしてその

存在性をもつてゐる。それらは高次の綜合的統一を支えんがための分化的機能として存在してゐるものであると見る事ができる。

これらの理由によつて、生體に發揮されてゐる統制力を、始原的獨立力としての細胞力と、綜合的獨立力としての個體力と、及びこれらの中間に始原的獨立力の獨特の集合によつて機能的全體性を發揮してゐる關聯力とに區分したのである。

さてこの獨立個體統制力は形相が物質的環境において發現してゐる原理であるが、これが自らの肉體を統制し、それを通して物的自然と作用しうるといふことは如何にして可能であらうか、先づこの「物質」と「形相」との共軛的接合的能作を成立せしめてゐる根據を問題とする。物質と形相との相互能作が可能なるためには、この二つのものを内に包みしかもこれらの交流を媒介する支えがなければならない。或は、物質そのものの構成の底がその存在の根源的場に於て形相と連結されていなければならない。物質と形相はまさに始原的事實に於て、交流可能 (communicable) でなければならないものである。われ／＼の哲學は實に「作用の中に生きてゐる」といふ始原的事實から出發する。そしてこの基礎の上に生命現象を可能にする一つの形而上學をよみとらうとするのである。

さて、科學的認識によれば、物質は空間そのものの屬性として、空そのものの中に發揚されてゐる力の源として、空間そのものの波動の源として理解せられた。われ／＼は、物質のわれわれに對する作用と抵抗とによつて、物質の存在の事實を疑う

ことはできない。故に空間なる物質存在の場は所謂空無なるものではなく、この場の中に何もものかの存在をみなければならぬ。われ／＼はこゝに、物質の事實の存在の支えとして認めねばならない實在を、即ち凡ての物質を内包する場を豫想する。このことは、物質を空間に張りつめられたオントロジックな大海の中の特異な部分として、特異な波束 (paquets d'ondes) として、特異な渦動 (tourbillons) として視ることをせまる。

物理學の假説の中に導入されたエーテルとはこの大海に對して名づけられたもので、これは物質の存在を支える場であるが故に、物質的存在はその存在において自らを支えるものとしてこれを顯わに意識しないけれども、凡そ存在の論理が問題にされる限りその究極に於て常に假定しなければならぬ謎の基礎である。即ちエーテルとは、物質的存在の前にはそれを積極的に支えるものとして彈力性をもち、而も自らは何ら質量を持たず、空間の隅々までに充ちわたるものである。これは物質との對比に於ては物質的影をすら示さない。凡ての物質の多は、この基礎なる大海の中のいくつもの波として、或はその流動のいくつもの様相として見る事ができる。實にそれらは「一つの多」としてあまりにもポエティックな存在の姿である。

さて生命の営みにおいて物質的環境の中に機能的力量を發揮せる主體たる形相も、物質的客觀的には、空無なる所謂形相的存在であつた。然しこれに對しても、物質に能作しそれに統制の原理を實現してゐるものとして、われ／＼はその存在を疑い得ない。従つてこゝに於ても、一切形相の包括的な原理をたゞ

え、夫々の形相を自らの中に編み出し、その存在の場となつて  
 いるものが豫想される。而して、生命體が生命の當みの特徴を  
 顯現しうる爲には、物質の原理を包む場と形相の原理を包む場  
 がそれら二つを同時に包括する根源的場によつて連接されてい  
 なければならぬ。われ／＼はこゝに、形相と質量を包括する  
 かゝる根源的場を「形質の場」(champ de forme-matière)と  
 名づける。こゝに、「形質」とは、形相の側からすれば形相を  
 産み出しそれを編み込んでいる實質であり、物質の側からすれ  
 ばその根底に於て認めることをせまられる實質である。(これは  
 は、生物學における形質にそのまゝあてはまるものでもなく、  
 又スコラ學者の *species* を指すものでもない。)

こゝに、生命の論理を敷くために設定した形質という言葉  
 は、凡そ物質的「有」の最上位の名稱であり、*summun genus*  
 である。然しおう／＼かゝる究極的「有」の前にもそれと同位  
 の「無」のあることを指示する形式論理學の心づかいはいわれ  
 われの前には存在しない。われ／＼は「存在」とは「場所」を  
 占めていることであり、「場」の中にあることであり、「存在す  
 る」とは、「場に支えられてある」こと、場の特異點として浮び  
 出ている」こととして理解している。従つてこゝに究極的「無」  
 とは、究極的「有」を支えている場そのものの別名と解釋して  
 いる。

われ／＼は一切の物質や形相の存在を、それらが内包する作  
 用力や機能によつて、いわば科學的に認めて來た。而してその  
 作用力たるや、物理學からすれば、空間そのものの屬性として

解釋されるものであり、空間自らの中にある力として認めざる  
 を得ないものであつた。従つて「形質」とは形相と物質とを内  
 包する實質に向つて、形質の場とはそれらの存在を支え作用を  
 可能にする場に對して、名づけたものである。これは實質に對  
 する捺印であつて、それ自身は再び無限に解釋しうるものであ  
 る。

こゝに、生命體の現象を特徴づける形相と物質はともに形質  
 より編み込まれた實在と見なされ、物質と物質、形相と物質、  
 形相と形相の作用はすべてこの空的實在の場において、或は形  
 質の場に媒介されて、なされるという原理が建立される。従つ  
 て、生物學的生命とは形質の場に形相と物質との結合せるもの  
 の一つの持續をいふ、生命現象とは形相がこの場を媒介にして  
 物質を統制し或は自ら形成した肉體を通じて物質の世界と能作  
 している現象であり、而して、一切の物質現象は形質の物質性  
 波動の束が場の秩序のまに／＼互に作用し干渉し合つている現  
 象であるとみる。客觀的科學の世界に於ける物と物との關係作  
 用の場はかゝる形而上學的な實在の場の一つの反映 *reflection*  
 と見なされるのである。即ち、物質の構成や構成状態を持續さ  
 せる力や一切の合法的變化や均衡調和の形跡を、全て、形質の  
 神祕な働らきの様相として理解する。

物質科學の法則はすべて形質の場の中に收められた物と物と  
 の作用の理法、場を通して行われる物的波動と物的波動との干  
 渉の理法であるとするのである。従つてわれ／＼の解釋からす  
 れば、物質や形相は形質の場に産み出されているという意味で

の「被造物」であり、而して形質の場は作用の場であるが故にこれは「創造の場」としての意味を擧ぐ可能性をもつ。

創造の基礎としての形質によつて一切は媒介的連続なるが故に、被造的世界の一切は作用可能であり、交通可能であり、社会的生産的であるとみられる。従つて、われ／＼は「意識」の如きも形相が形質の場に於てもつ關係一般であると解釋するのである。形質は一切のものからの作用を傳達しうが故に、形相は自らの中に發動するところの形質と關係する能力によつて一切の世界と意識的に接する。かゝる意識的接觸をわれ／＼は「思考作用」ともよんでいる。この思考において、これが形相の側から觀られるときそれは主觀とよばれ、形質の場の側から觀られるとき客觀といわれる。かくて主觀は、場との關係において、場を通じてなされる諸交渉、諸經驗の統一體を形づくつてゆく。即ち、一個の形相は無始からの一切の諸經驗——一切の他との交渉の足跡——によつてその特徴即ち「自我」を構成する。かゝる獨個の形相は自らのうちに過去の諸經驗  $a, b, c, \dots$  を刻んでいるが故に、それら諸經驗の關係的集合  $(a, b, c, \dots)$  に新來の感覺的或は知覺的或は直覺的經驗  $x$  が干渉するとき、そこには一つの現在的作用  $(a, b, c, \dots) \rightarrow x \rightarrow (a, b, c, \dots)$  が生れるであらう。かく形相は新經驗によつて變形する。この變形 (deformation) が場に反映されるとき「思考の作用」が現れる。この結果、新經驗は「知識」として自覺されゆくものと思われる。かゝる作用的流れ一般をわれ／＼は「意識」とみるのである。従つて、本質的な過程のみを問題とする限り、意

識とは形相と環境との關係一般であり、形相とそれを支える場との關係一般であると見られる。かく意識とは存在の場との作用的關係に於てみられたのであり、知識も、場に於ける相互關係の活動において自覺されゆくものとなつたのである。

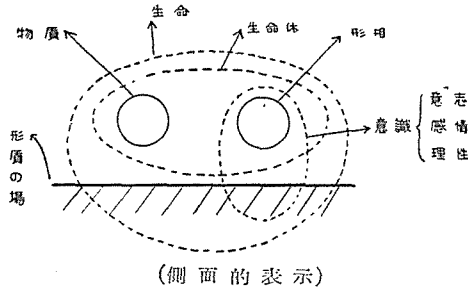
意識或は思考によつて形相は常に變形しながら流れてゆく。かゝる絶えざる流れが「生命」と呼んだものであつた。形相は經驗によつて次々に造り變えられてゆく。かゝる再構成の過程が生命の生活である。これは肉體というオルガニズムにおいてなされる。生命體としての肉體は形質の場に於ける形相と物質との媒介作用の機能體と解釋される。

かくて「形質の場」は「生命の場」となるのである。こゝに、形質の場は作用的・生命的であり、總じて創造的であるが故に、被造的形相が保持する意識は創造そのものを自覺するよりも高き能力として「精神」にまで高められる。即ち形相と場との接觸關係の疎密によつて植物・動物・人間における意識の上昇があり、人間に於て高級なる自覺的精神に達する。創造の衝動やその喜びやその秩序を自覺するこの意識の力は、それぞれ「意志」と「感情」と及び「理性」とに對應すると解釋する。こゝに私は生命の認識論的論理學を展開する位置にいる。然し、論理學そのものに深入りすることは本文のコースではない故に、われ／＼はわれ／＼の哲學の基礎とその方法を簡單な圖式によつて示すことだけで満足しなければならない。

- (一) 形相及び物質は形質の場に浮動する實在である。  
 (二) 形質の場は形相と物質の媒介的作用の場であり、創造進

化 (evolution creatrice) の場である。

(三) 生命とは形質の場に形相と物質との結合せるものをいふ。



(四) 生命現象とは創造の場の媒介によつて形相と物質とが能作輪轉する現象をいふ。

(五) 無生物は形質の場に於て單に限定せられたという受動的段階における個體で、生物の環境となり生命界の内容となる。

(六) 植物は只天地の一方向にのみ即ち縦に伸びること、に於て無生的環境を限定するのみで、左右に移動して物的環境を限定するに至らない。これは動物界の環境となる。

(七) 動物に於ては場に於ける自己限定は漸次明瞭となり、移動することによつて環境を能動的に限定する。然し、これは單なる衝動によつて環境と對立しているのみである。これは人間社會の環境となる。

(八) 人間に至つて、形質の場の中に自覺的に自己を限定する物質と精神の架橋(完)

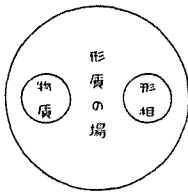
る。左右上下の移動によつて環境を自覺的に利用する。彼は目的行爲の主體となり新しい創造を展開する。

(九) 物質的受動と形相的能動と合體せるものが形質の場に於て流動的に統一されゆくことが、生命であり、かゝる合體が場に於てもつ關係一般が生命體に生ずる意識である。

(十) 創造の衝動、創造の喜び、創造の秩序を自覺する人間主體の意識力がそれぞれ意志と感情と及び理性とである。

(十一) 感情の根源には生きんとする盲目的意志が動き、眞紅の熱愛が動き、

(十二) 理性の根底には善惡を判定する審きの力が働く。……さて、さきにかゝげた側面的な圖によつて、形相と物質が場の外に浮び出ているという錯覺に陥ることを防ぐために、創造の場の一部そのままが物質であり、形相であるという今一つの表示をこゝに補つておく。



これは形質の場を包括者或は創造者の體として解釋することに役立つであらう。

創造の場に於て形相と物質を立てることにおいて、或る人はこれを二元論とする。しかしこれは、デカルトの二元論の立場ではない。物質はその構造と機能の根元において如何なる微小な單位の中に至るまで形相の能動を受け入れ

る無限の可能性を持つものであり、形相の能動の階位に應じて物質はそれだけ高い受動性を發揮する。これは實に形質の場に於て一體的に顯現されるのである。かく物質は、形相に相對するものとして、形相の能動的刺激に感應する無限のポシビリテを胎藏しているものとして、形相の能動を待つていたのであり、この受動と能動とを一體にして創造的進化を媒介展開せしめるものこそ形質の場であり、この場の中で二元が應合して躍動するものを生命として解釋するのである。われ／＼の形而上學に於ては物質と精神は二元である。然しこの二元たるや、物質は形質の場に浸された一元であり、精神（形相）も形質の場に浸された一元である。従つて、この場を媒介にして創造を成就する可能的創造的一元の世界がわれ／＼の形而上學の世界である。而してそれは作用的進化の場、因縁的變化の場としてあるが故に、この形而上學を支えているものはあくまで辨證法である。それは唯物辨證法でもなく、精神辨證法でもない。これら二つの實體の能作關係を可能にする「場の辨證法」である。

かく形相と物質の能動受動を支える媒介の場の辨證法なるが故に、この形而上學に於ける哲學の方法は「形質辨證法」(dialectique de F.M.) 或は「媒介辨證法」(dialectique médiate) とも名づくべきものである。

さて、われ／＼の認識の過程に於て、物質がわれ／＼の感覺作用を通して知覺せられてであるという事實によつて、その究極の空の場に於ても、あくまでこれら物質の多様を支えその作用を傳ふる存在論的物質の場の存在を見たのである。われ／＼

は感覺は物質自體を傳えないにしても、感覺によつて傳えられるものは空想ではなく、實在の一つの様相であると見る科學的な立場をとつた。即ち認識の出發に於ては、われ／＼は「存在することは知覺されてある」(esse est percipi) ことであるというバークレーの立場に立つてゐるけれども、彼の如く知りうるものは知覺によつて生じた主觀的觀念のみであるという主觀的觀念論に墮することはできない。われ／＼は、バークレーのやうに單なる知覺にたよらず、即ち意識の構成作用を個人個人の精神の中に見ず、意識一般を成立せしめている普遍的な場を、そしてこの場との接觸に於て個人個人が發揚する意識の働きの普遍性と客觀性を見るのである。即ち、個人個人の意識の成立を形質の場との媒介關係に於て見た故に、それ／＼の意識の根底には場による媒介の統一的形式が存在することとなるのである。この意識統一者は個々の意識を超越し、意識一般として個々の意識外に妥當する。従つて、認識の客觀性はこの場合また主觀の統一的形式によつて保たれてゐるとも見られるのであつて、客觀的妥當性は結局主觀的必然的普遍妥當性と同一となる。カントの所謂直觀形式・思惟形式の先天性、いわば理性性の權威は形質の場における媒介の普遍性にあるとみることが出来る。知識の客觀性をわれ／＼はかく解釋する。この意味では、われ／＼はカントとともに合理主義的であり、先驗的觀念論的である。然し、カントが認識の先驗的の原理として認識論の根源に定めたものは文字通りアプリアオリなものであつた。そしてこのことによつて彼の哲學に於ける「物自體」は全く捕えること

の出来ない謎になつてしまつたのである。

われ／＼はこの先天的な原理をもなお科學的作用的に追求する。作用的目的を深めんとしてこれらの先天性をいわば地上の科學的作用の場に於て解釋せんとするのである。

物自體とはカント哲學の一つの困難であつて、所謂狡智にたけた概念であるが、われ／＼には然し、物自體というようなもののはむしろ存在しないのであつて、物體の浮動を支えている空の場、物質と形相を媒介する創造的形質の場があるのみである。

現代のわれ／＼は科學の發展によつて物質の客觀的作用に目醒めている。然しこのことゝは逆に、精神の實體を闡明にするためには、今や實體的作用に目覺めなければならぬ。そのことのためにばかりは先天的原理をも實體的作用の場に於て翻譯しなければならぬのである。

科學的批判的に實體的作用に目覺めてはじめて、進展する物質的技術社會に生きる人間の實像とその社會性が鮮明になるのである。

## 五、生命に對する直感的認識

生命に對する以上の認識の範圍は關係的・作用的・科學的であつた。われ／＼はこゝに更に直觀の働かしを加えよう。即ち、生命そのものの始源を共感するといふ所謂直觀的方法(méthode intuitive)によつて理性的批判的哲學の流れ出る本源を感じとらんとするのである。

この過程は批判的理性による省察ではないけれども、哲學が自らの批判的な知識に實力を獲得するために、その最高位に於て常に發揮しなければならぬ單純にして唯一の行爲である。さて、私は「自分が生きてゐる」ということを疑いなく信ずる。「生きてゐる」とは如何なる事か。それは物質の世界と作用的に交流しながら一つの統制を保持していることである。それは光に浴し、空氣を吸ひ、食物を食うことである。一つの統制を保持しているということの中にわれ／＼は二つの事實を讀みとることができる。

その一つは、體温を温めるため光に浴し、血液に酸化作用を興えるため空氣を吸ひ、エネルギーが必要だから飯を食う等の思考を働かせることなく、無意識で、たゞ光に浴し、たゞ呼吸し、たゞ食うことによつて直接の生をたゞその儘生きてゐるということである。「たゞそのまゝ生きてゐる」ということによつてわれ／＼は意識を超えてはるかに「生」が存在していることを觀ることが出来るのであるが、これは、無意識の状態に於て形相と物質とが自然の場に於て合一しているということ、或は形相の波動が全肉體の物質性波動に同調しているという事實を表している。他方、われ／＼は有意的意識的に行動する。これはいわば意識的に生きてゐるという事實である。このことは形相が物質に作用しうること、即ち、形相は意志の發動によつて波動を自開しそれによつて肉體細胞の物質性波動を變調し得るということを表わしている。前者が靜と休息と同調であるのに對し、後者は動と活動と變調である。總じて、生きてゐるといふ

事實の科學性は自由意志 (*libre arbitre*) の可能性を支える。この同調と變調の可能性の中に、われ／＼は、形相と物質の同時的全體的存在を體驗することができる。物理學に於て理性の所産たる數學によつて即ち記號的論理學によつて物的自然の現象を記述出来るということは、人間の自覺的靈性の中には、物質の構造とその働きの中に於けると同じ寂知、同じ秩序が働いて、いるということを豫想せしめる。

こゝに私は、人間存在の根源である形相も物質や光と同じく辨證法的な形質の場に自己を限定せられて産み出され、生かされ、自らは反つてその場を限定することに於て主體として生き、そして個々の主體はこの場を媒介にして相互に應合連繫し作用しあつているのであるという形而上學を信ずるのである。

形質の場はあらゆるものの存在の場であり、あらゆるものの相互作用の場であり、總てのものを辨證法的に連繫する生命の場であり、自然を調和的存在たらしめ寂知の海たらしめている根源的な場であり、世界を生成發展せしめてゆく創造の場である。

物質と生命存在の究極において論理的理性的に「空無」なるものとして或は「妙有」なるものとしてみられた形質の場は、一切に遍ねく全空間を張つているが故に普遍者一般者の體 (*substratum*) として、又あらゆるものを内に包みその存在を支えているが故に「包括者」の體として、又一切のものの創造進化の支えなるが故に「創造者(志)」の基礎として、又生命秩序の絶對性、自然攝理力の絶對性にない手なるが故に「絶對生

命」「絶對神」の基礎として理解するのにふさわしい。

従つて、われ／＼が論理的に規定した形質なるものはこゝに包括者の質として解するより外にすべなく、これ以外に私は神を認識し信仰する方法を持ち得ないのである。私は神の存在を形質の場において認める。これは、われ／＼の感覺する自然を理性的に、神性に益れたものとして認めることとなり、現實に形質をもつた一切のものの中に科學的知性に矛盾なく神を觀ることになるのである。

私は生命體を、形質なる絶對生成の場の中にいわば靜物的形質と動的形質の重合した微細胞の複雑な集積として、その生命性(能動受動)の段階に應じて、植物・動物・人間に區別され、而もこれらの個性あり變化に富める數々の生命體がその生命力を波動として湧現し、形質の場を通じて相互作用し、對立を通じて親和と調和を實現し、次々と欲求を生じ、生命の發展と創造を繰り展げてきたとみるのである。従つて、「形相と物質の一切は作用し滲透し合つていゝ。一切のものは互に離れては存在し得ない。一切の精神的作用は必ず物質的效果を顯現する。一切は絶對秩序のみなきる形質の場に接するが故に、この場限定せられながらも、漸近的無限に眞實を圓かに映す知慧をもちうるものである」というのが私の信仰である。

## 六、形而上學への反省

形質の場が孕んでいる創造の力はいわば未來への意志である。未來的意志はあくまで暗號であり陀羅尼である。未來への



衝動そのものはあくまで自由である。生命そのものは謎である。然し、生が存在していると同時に生の絶対秩序が存在しているが故に、われ／＼はこの秩序を理解し生の自覚を深めることは可能である。常に世界建築の構成を解釋して進むこと、ただこのことだけが理性の營みとしてわれ／＼には可能である。われ／＼には形質の場そのものやその場に發動する絶対創造神祕力は謎であるけれども、無限の照明によつて、神祕力よりなる一切の構成の秩序を限りなく解釋してゆくことは許されている。そしてこのことによつて進歩する理性を常に暗號の意志に結合することが形而上學の最高の衝動である。

私は現代の理性による世界秩序の解釋に一つの統一を附與して暗號の存在を照明する一つの方法を與えんとした。従つて、この形而上學の中に提示しているのは、無限の自由をもつ神そのものではなくして、神の存在を見る一つの方法である。神とは絶対意志なりということの證明や神の存在の證明を掲げているのではなくて、如何にして神を觀ることができるかという解釋學的な方法 (méthode herméneutique) を提出しているのである。

理性を込めて神を見る方法は、昏迷せる現代の最高の要求である。現代科學が沈める生命としての物質の秩序を波動として把握しているが故に、これらの知性に對して最も効果的に神の創造の一切を接續させるために、私は創造の形相を波動として解釋した。

波動とは實在の辨證法的進化の客觀的・科學的描寫である。

物質と精神の架橋(完)

私は一切の創造を辨證法的呼吸として解釋する。正負・陰陽・左右上下の共存に於て、緊張と遲緩、意識と無意識の共存に於て、この兩極を合せて進む波動によつて理解する。私は神の言葉をこの呼吸によつて最もよく理解できたのである。

神の衝動なる絶対善意を無限の變數なる被造物の波動の交流と干渉によつて、而もその底に生の絶対秩序を嚴として貫きながら創造的進化を實現するものとして解釋したのである。従つて、これは世界の波動的解釋である。

而して、これは想像的體系 (système imaginaire) である。然し、想像的構成の論理が現實の科學的理性によつて支持され現實の世界にその一切の反映をもつていなければならない。この想像的論理は眞なるものとして受取られねばならない。これこそ自然科學が既に採用している方法であつて、この意味に於て私の採用した過程は全く科學的な世界解釋である。現實への知見の深化は常に新しい想像的表象を實體の世界に建築せしめる。蓋し現代物理學が波動と粒子の相補的の二面によつて物質粒子を解釋したことはまさに想像的理性の產物である。然しこれは、實驗によつて支持されているが故に、誰も想像的知性の僥用であるとはいわない。私の世界解釋が科學的形而上學たりうるや否やはこの點にかゝつている。蓋し、形而上學が統一的解釋の欲求から出發している限り、その學問的價值は批判的諸科學に對してより統一的な原理としてどれだけ有効に働くかという實際的な効果にかゝつている。そして、この實力によつて、はじめてそれが眞理に對する一つの解釋として登場しうるのである。(完)

(筆者 大阪大學理學部講師)